

資料紹介

宮城県北部採集の古式須恵器

木村 太一・高橋 透・藤原 二郎

はじめに

今回紹介する資料は、共著者である藤原二郎が宮城県北部を流れる鳴瀬川周辺を中心に1996年から2022年にかけて採集した、田辺昭三（1981）による陶邑窯跡群出土須恵器編年のTK23型式からTK47型式の古式須恵器、およびTK208型式以前の初期須恵器である。

宮城県では、中部の仙台市においてON46型式に位置づけられる大蓮寺窯跡（渡辺・結城ほか1976）や、TK208型式の金山窯跡（斎藤1981）が確認されており、また仙台市内で初期須恵器および古式須恵器が出土する遺跡は、窯跡を除いても合計13遺跡で50点以上が認められる（山田2007）。

一方、北部では大崎市・加美町・栗原市を合わせても7遺跡1地点であり¹⁾、報告されている資料は合計27点で、器種は杯や高杯、甌に限られる。

こうした状況のなか、藤原二郎は12地点で合計32点の初期須恵器または古式須恵器を採集しており、これまでに宮城県北部で報告された出土量を上回り、希少なものも含むため、今回資料を紹介するに至った。

以下では、最初に採集地点についてまとめ、採集された資料の特徴とその編年的位置づけを行い、最後に資料の重要性について触れる。

I. 採集地点について

初期須恵器および古式須恵器が採集された地点（図1）は、おおきく四つのグループに分けられる。

グループ①は江合川周辺の大崎市古川大崎から古川小林にあたり、図2-8は新谷地遺跡、14・18は名生館遺跡、24は塚原古墳群の範囲内で採集されている。グループ②は鳴瀬川周辺の色麻町四竈から大崎市古川堤根にあたり、22は齊田館跡、7・11・15は堤根遺跡の東側近接地、21は堤根遺跡の北側近接地で採集されている。グループ③は鳴瀬川と多田川が合流する大崎市三本木桑折から上伊場野にあたり、1・4・13・16・26は鳴瀬川の中州、2・3・6・10・17・20・23・25は右岸の河川敷、5・9は現在の下伊場野公園内で採集されている。グループ④は①～③よ

りも鳴瀬川下流の大崎市鹿島台船越から美里町和多田沼にあたり、12・19・27は右岸の河川敷で採集されている。

II. 採集された初期須恵器および古式須恵器について

採集された32点うち、27点を図示した（図2）。

図2-1～3は杯蓋である。1は復元口径11.4cm、器高4.3cmで、天井部は丸みをもち、全体の1/2ほどの範囲まで回転ヘラケズリが施される。天井部と口縁部の間に稜がつくりだされ、口縁部は直線的に垂下し、端部に段が認められる。天井部ヘラケズリの範囲が比較的狭いことや天井部に丸みがあること、口径11cm台の杯蓋はTK23号窯やTK47号窯を中心にみられることから（佐藤2007）、TK23型式からTK47型式に位置づけられる。2は器高3.8cmで天井部が平坦であり、稜直上まで回転ヘラケズリが施される。稜上部では強いナデにより沈線状の段が形成され、口縁部は垂下して端部でわずかに外傾する。器形や端部の特徴から、TK47型式以前のものと考えられる。3は天井部から稜直上付近まで回転ヘラケズリが施され、口縁部が垂下して端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。回転ヘラケズリの範囲と口縁部の特徴から、TK208型式からTK47型式に位置づけられる。

4～8は杯である。4は口径11.0cm、受け部径13.4cm、器高5.2cmで、ほぼ完形である。底部は平底状で、体部は丸みをもしながら立ち上がり、底部から体部の1/2の範囲に回転ヘラケズリが施される。受け部は広く、口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。内底面にはナデ調整が認められる。丸みをもった体部や回転ヘラケズリの範囲が比較的狭い特徴から、TK208型式からTK23型式に位置づけられる。5は復元口径11.4cm、器高4.7cm、復元受け部径14.0cmで、底部は平底状で体部が強く張り、底部から体部の1/2の範囲まで回転ヘラケズリが施される。受け部は広くつくりだされ、口縁部が内傾する。平底状で体部が強く張る特徴から、TK208型式に位置づけられる。6は復元口径9.6cmで、体部は丸みをもって立ち上がり、体部下半に回転ヘラケズリが認められる。受け部は斜め上方へ伸び、口

縁部は内傾する。口径が小さいことや体部の丸みが強いこと、回転ヘラケズリの範囲が狭いことから、TK23型式からTK47型式に位置づけられる。7は復元受け部径12.6cmで、底部は平底状で体部が強く張り、受け部直下まで回転ヘラケズリが施される。口縁部は内傾しつつ直線的に立ち上がる。平底状で体部が強く張る特徴からTK208型式に位置づけられる。8は受け部が比較的広く、口縁部は短く内傾し端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。小片であるが口径が大きい可能性があるため、TK23型式からMT15型式まで新しくなる可能性がある。

9～12は高杯で、9～11は無蓋高杯である。9は体部が直線的に伸び、口縁部との境には突線がみられる。口縁部は短く直線的に外傾して伸び、端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。こうした器形はTG232号窯（富加見ほか1995）や濁り池窯（田中1999）でみられ、TK73型式以前にさかのぼる可能性がある。10は復元口径16.2cmで坏部下半にヘラケズリが施される。体部は丸みをもって立ち上がり、板状の把手が付される。口縁部は強く外反し、口縁端部で直立する。体部には2条の突線の下に5条1単位の櫛描波状文が施される。この器形はTK216型式からTK47型式にみられ、突線間に把手が付される例はTK208型式を中心認められることから（田辺1981）、当該期に位置づけられる可能性がある（田辺1981）。

11も10と同様に体部に2条の突線がめぐり、その下に5条1単位の櫛描波状文が施される。12は復元底径10.4cmで、脚部が1/5ほど残存しており、両側面に透かし孔がみられることから、透かし孔は四方に穿たれたと考えられる。脚部は「ハ」字状にひらいて伸び、端部は丸みをもち、その上部に1条の突帶がめぐる。器形および四方透かし孔がみられることから、TK216型式からTK208型式に位置づけられる。

13・14は椀である。13は復元口径8.2cmで、体部はゆるやかに丸みをもって立ち上がったのちに内湾し、口縁部が直立する。体部上半と下半に突線が付され、水磨によりほとんど磨滅しているが、突線間に櫛描波状文が施される。14は復元口径9.8cmで、体部は丸みをもち体部上半に最大径をもつ。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。体部下半と上半の突帶間に8条1単位の櫛描波状文が施される。器形の特徴から、TK23型式以前のものと考えられる。

15～17は甌で、いずれも注口は残存していないが、器形や文様から判断した。15は樽形を呈する胴部側面の破片であり、胴部外端には突線がめぐり、その口縁部側には5条1単位の櫛描波状文が施される。16は肩部が丸みをもち、胴部上半にはカキメ後に6条1単位の櫛描波状文が施される。17は肩部が丸みをもち、1条の沈

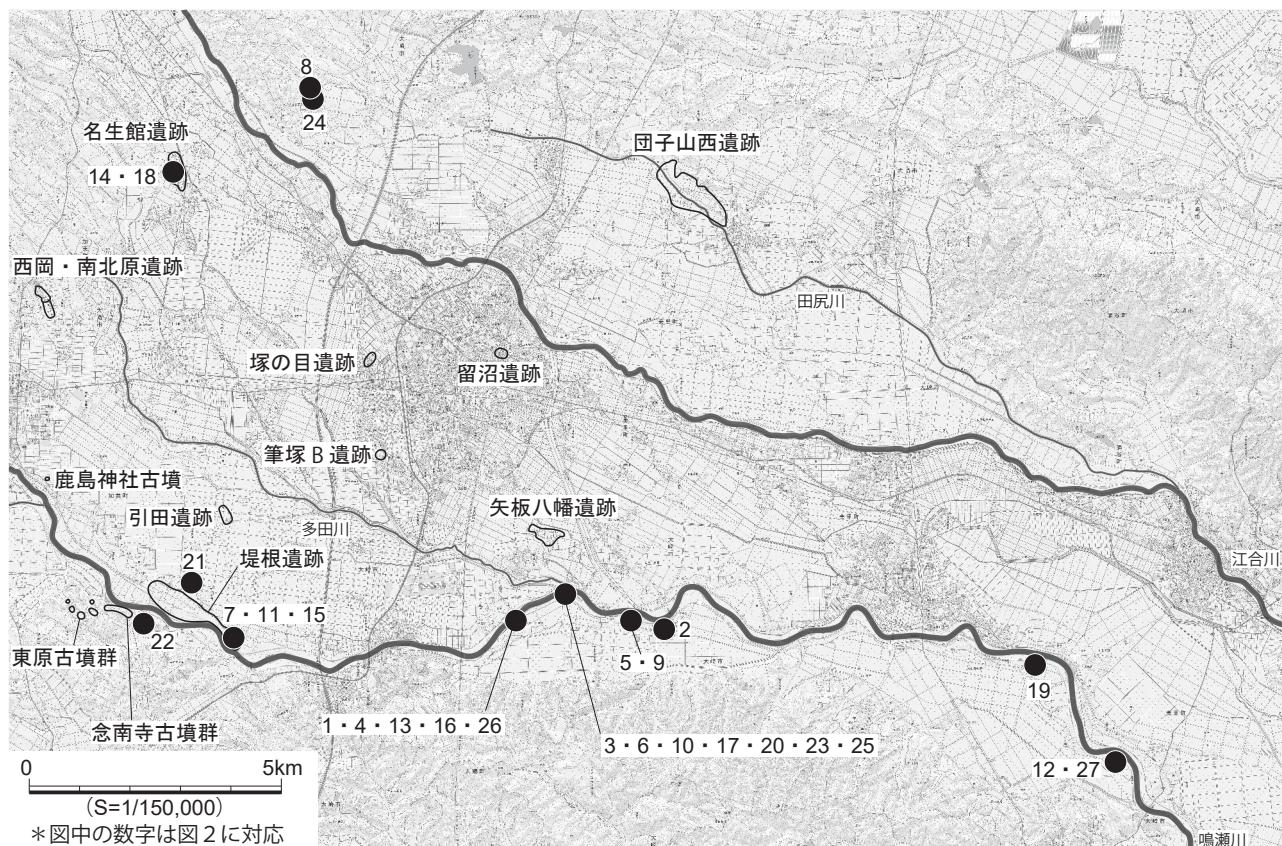


図1 古式須恵器が採集された地点と周辺の主な古墳時代中期の遺跡
(電子地形図 25000〔国土地理院〕に加筆して作成)

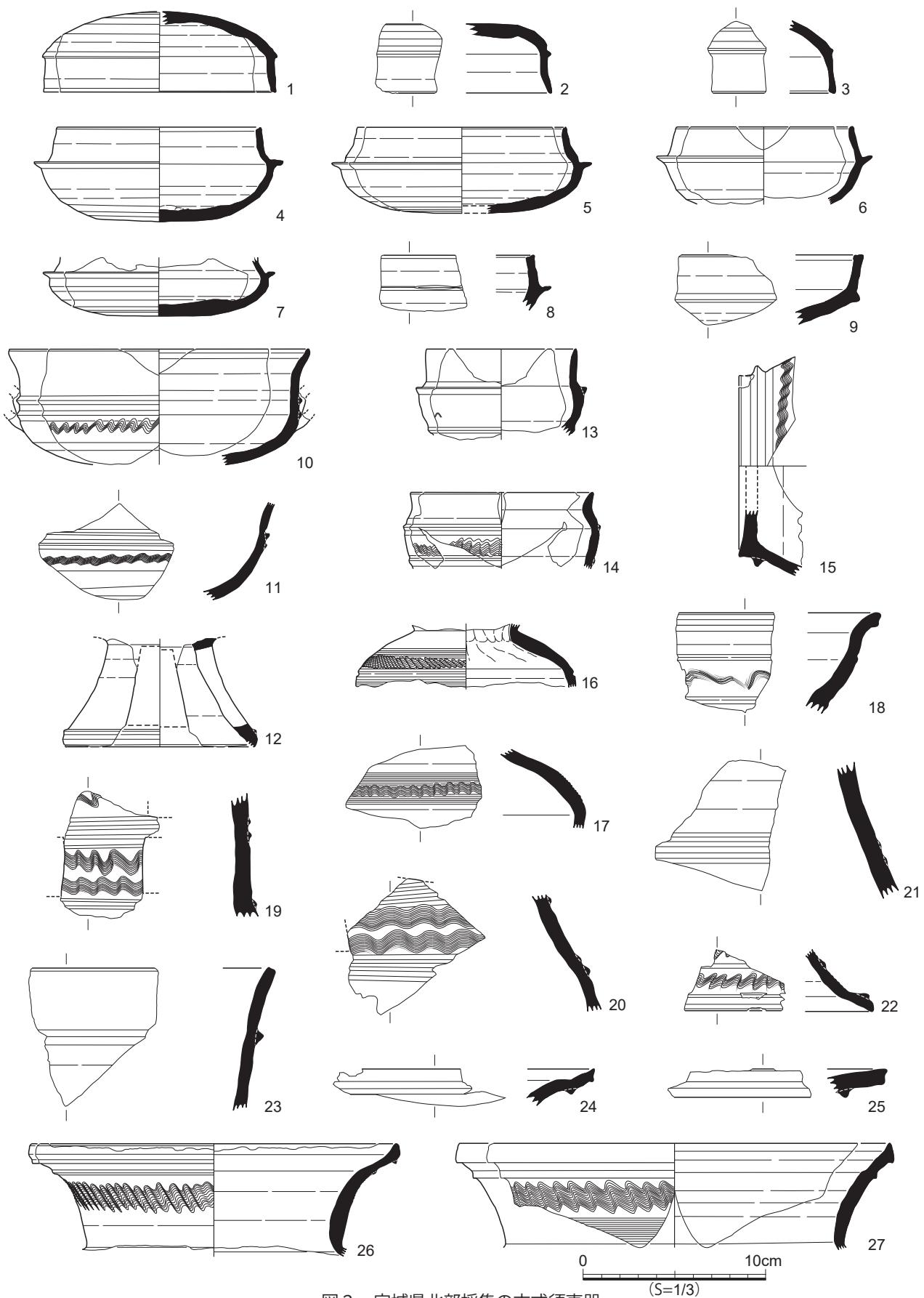


図2 宮城県北部採集の古式須恵器

線がめぐる。胴部上半にはカキメ後に6条1単位の櫛描波状文が施される。胴部内面には絞り目が観察でき、頸部の内面にはナデがみられる。器形や文様の特徴から、いずれもTK47型式以前のものと考えられる。

18～22は器台である。18は口縁部片で、体部はやや丸みをもち、口縁部が外反する。体部には2条の沈線の間に6条1単位の櫛描波状文が施される。19～21は脚部片で、19は3ヵ所に長方形の透かし孔が穿たれ、2条の突線の間に2段の9条1単位の櫛描波状文が施される。20は三角形または長方形の可能性のある透かし孔が2ヵ所穿たれており、2条の突線の間に2段の11条1単位の櫛描波状文が施される。21は2条の突線がめぐる。22は脚端部片で、上端に突線がめぐり、その上部に7条1単位の櫛描波状文が施される。器形や文様の特徴から、いずれもTK47型式以前のものと考えられる。

23～27は甕である。23は頸部が直立して直線的に伸び、中位に1条の突線がめぐり、口縁部端部は面取りされる。24は頸部が大きく外反して水平方向に伸び、口縁部が外傾して受口状となる。口縁端部の上下端はつまみ出される。25・26は頸部が大きく外反し、口縁部が水平方向に伸び、端部は面取りされ、その下に突帯が付される。器形や文様の特徴から、いずれもTK47型式以前のものと考えられる。

III. まとめ

以上、藤原二郎が宮城県北部で採集した初期須恵器および古式須恵器は、これまで宮城県北部で報告された出土量を上回るものであり、またこれまで確認されていない椀や器台、甕、そして樽形壠がみられた。時期にかんしては、TK208型式からTK47型式を中心に、TK73型式以前にさかのぼる可能性があるものも確認できた。

これらが採集された地点と周辺の遺跡をみた際、注目すべきはグループ①で、家形石棺やTK208型式に併行する時期の円筒埴輪が出土した前方後円墳である念南寺古墳および念南寺古墳群（八嶋ほか1998）、念南寺古墳に後続する首長墓とみられる円墳の御山古墳・鹿島神社古墳が隣接する。また周辺で7・11・15・21が採集された堤根遺跡では、古墳時代中期の石製模造品が採集されており（高橋2006b）、水辺の祭祀が行われた可能性が指摘されている。採集品であるが、そうした地域において多数の古式須恵器が存在することを明らかにできることは、今後の研究の進展に寄与する貴重な成果である。

謝辞

本稿を作成するにあたり、古川一明氏、村田晃一氏、佐藤涉氏から多くのご教示をいただいた。末尾ながら感

謝申し上げます。

註

- 1) 山田（2007）の集成によれば、大崎市名生館遺跡（鈴木・高橋1990・1991、高橋ほか2001・2002）・清滝城内遺跡（渡邊・井口1987）・筆塚B遺跡（佐藤2003）・留沼遺跡（高橋2006a）、加美町壇の越遺跡（斎藤ほか2003）・米泉城跡（板垣1973）、栗原市長者原遺跡（三好・佐藤1995）・油田地点（佐藤1976）で出土が確認できる。

引用・参考文献

- 板垣剛夫 1973 「古墳時代」『宮崎町史』、pp.101-169、宮崎町
斎藤篤ほか 2003 『壇の越遺跡IV』、宮崎町教育委員会
斎藤秀寿 1981 「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」『陸奥國
官窯跡群IV』、pp.8-28、古窯跡研究会
佐藤隆 2007 「6世紀における須恵器大型化の諸様相—陶邑窯
跡編年の再構築に向けて・その3—」『大阪歴史博物館研
究紀要』、第6号、pp.25-48、大阪市文化財協会
佐藤信行 1976 「古墳時代」『築館町史』、pp.167-178、築館町
佐藤優 2003 『筆塚B遺跡』、古川市教育委員会
鈴木勝彦・高橋誠明 1990 『名生館官衙遺跡X』、古川市教育委員会
鈴木勝彦・高橋誠明 1991 『名生館官衙遺跡XI』、古川市教育委員会
高橋誠明 2006a 『留沼遺跡』『古川市史』第6巻資料I（考古）、
pp.198-211、古川市
高橋誠明 2006b 『堤根遺跡』『古川市史』第6巻資料I（考古）、
pp.232-233、古川市
高橋誠明ほか 2001 『名生館官衙遺跡XII・南小林遺跡』、古
川市教育委員会
高橋誠明ほか 2002 『名生館官衙遺跡XIII・灰塚遺跡』、古川
市教育委員会
高橋誠明 2014 「古墳築造周縁域の地域社会の動向」東北・
関東前方後円墳研究会（編）『古墳と続縄文文化』、pp.175-
194、高志書院
田中英夫 1999 『濁り池須恵器窯址』、信太山遺跡調査団
田辺昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店
富加見泰彦ほか 1995 『陶邑・大庭寺遺跡IV』、大阪府教育委員会
八嶋伸明ほか 1998 『壇の越遺跡・念南寺古墳』宮城県教育委員会
藤沢敦 2001 「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻第3号、pp.41-54、考古学研究会
三好秀樹・佐藤信行 1995 『長者原遺跡』、栗駒町教育委員会
八嶋伸明ほか 1998 『壇の越遺跡・念南寺古墳』宮城県教育委員会
山田隆博 2007 「宮城県出土の古墳時代須恵器」『多知波奈の
考古学—上野恵二先生追悼論文集—』、pp.189-204、橋考古
学会
渡辺泰伸・結城慎一ほか 1976 「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査
報告」『陸奥國官窯跡群II』、pp.1-29、古窯跡研究会
渡辺泰伸・井口祐二 1987 「宮城県の様相」『第8回三県シン
ポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第II
分冊、pp.443-472、千曲川水系古代文化研究所